

花脊 〈山里の生活文化〉



福田寺山門前に移転した経塚碑（別所町）

花脊^{はなせ}は鞍馬の北方に位置する集落で、花脊峠を越え^{べつしよ}ると別所^{おおふせ}・大布施^{やます}・八柘^{はちぢ}・原地新田の四か村から形成されてきました。中世までは丹波国桑田郡に所属していましたが、江戸時代には山城国愛宕郡となりました。四か村が合併して花脊村となるのは明治二十二年（一八八九）で、昭和二十四年（一九四九）には京都市左京区に編入され、現在に至っています。

花脊は別所川や上桂川に沿って南北に広く点在する集落です。南端の別所では、平安時代末期から鎌倉時代初頭の遺跡である花脊経塚群が発見されています。そのなかの毘沙門天像は象徴的な出土品で、この地域一帯は大変宗教的色彩の濃い所として考えられていました（写真はその顕彰碑）。十二世紀中頃には、現原地町の地に峰定寺^{ふじょうじ}が建立されました。峰定寺は大悲山と号し、山岳修験者による霊地として注目された寺院です。下って十六世紀後半から各村は施薬院領^{せやくいん}となり、江戸時代まで続きます。



峰定寺山門（原地町）

村の生活は、山間地であるため、米の収穫はあまり望めなかった
ので、炭焼生産が活発になされてきました。江戸時代中頃には、
炭の生産量は年間千俵にも達しており、村々では炭焼窯が多く
設けられていました（現在は全く残っていません）。

明治時代になると各村においては次々と小学校が開校され、明
治三十二年（一八九九）には花脊峠が開削。昭和初年にはバス
も通行するようになりました。夏場の献火行事としての「花脊
松上げ」（京都市無形民俗文化財）が毎年盛大に行われているの
も、この集落の長い歴史を物語っています。

しかし近年では若者が地域から次第と離れていって、住民の高
齢化とともに過疎化が進んできました。花脊には「花脊山の家」
「山村都市交流の森」といった巨大野外活動施設ができています。
多くの方々が、この自然豊かな歴史のある花脊の里に是非とも
訪れて欲しいものです。

広河原 〈山里の自治と信仰〉



「松上げ」終了後の広河原の風景（正面、倒された燈籠木とうろうぎ）

広河原ひろがわらは左京区北端に位置する集落ですが、古くは丹波国桑田郡山国荘（現在の右京区京北町地域）に属していて、同荘の「奥山」と称されてきました。また「船ヶ原」という古名も使われていました。「広河原」なる地名は、十七世紀中頃にはみられるようになり、この頃から次第に村落としてのかたちが整えられてきたようです。

田畑も徐々に増えてはきましたが、耕地の大半は畑でした。ところが主産業としての炭生産は大変好調で、文化十年（一八一三）には京都への出荷数は四四〇〇俵に達していて、炭窯数も最盛期には七十四基といった規模でした。広河原から生産される炭は、鞍馬の炭間屋を経由して京都の町中に届けられました。したがって炭焼きによる現金収入は、広河原の里人にとって極めて重要なものであったことがわかります。

一方集落の自治に目を向けると、十七世紀後半までは山国十か村の出村としての形をみせていましたが、山国との確執を生むなかで少しずつ分離独立の方向へと進んでいくのでした。山国からの完全な独立は、明治四年（一八七二）に山村六四〇町歩



「広河原ヤッサコサイ」(京都市文化財保護課提供)

を買い取ることでも実現しました。山国は、農兵隊である維新勤王隊(山国隊)に関わる費用捻出のために売却したといえます。

広河原の里人による自治は、長年にわたるなかで強固なものとして築きあげられたのでしょう。それらは年中行事のなかにもみられ、なかでも「六斎念仏(現在伝承されず)」や「松上げ」は、里人の精神的紐帯を知るうえで貴重です。現在、「広河原松上げ」とその後に行われる盆踊り「広河原ヤッサコサイ」は、京都市無形民俗文化財に登録されています(写真参照)。毎年八月二十四日に催される祭りの日には、大勢の人々で賑わいます。昨今、集落は過疎化と高齢化が進み、地元にあった市立堰源えんげん小学校もついに廃校となってしまいました。近年は道路の整備が行き届いたこともあって、自家用車やバスによって、京都市中との往来も便利になりました。広河原には市内唯一のスキー場(広河原スキー場)もあります。僅か五十二戸の集落ではありますが、その里を包み込む美しい景観は昔の面影をしっかりと伝えています。